

【事例紹介】退院後に歩行能力が向上

通所リハビリでは自宅に帰った後も入院中のリハビリを引き継ぎ、リハビリ専門職の指導のもと運動を継続することが出来ます。右膝の骨折により回復期病棟でリハビリを受け、退院後もリハビリを継続し歩行能力が向上した事例を紹介します。

開始時から続けている運動



利用開始時にはまだ右膝の腫れや痛みが残っていました。入院中に担当の理学療法士に作ってもらった自主練習表を見て運動するようにしました。(左写真)

歩行器は入院時に練習したものをそのまま使用して歩行練習をしました。(右写真)

最近、導入した運動



1か月ほどで腫れも引き、痛みも少なくなりました。ペダル漕ぎなど膝の運動を多く取り入れて運動をしました。(左写真) 歩きも車輪付きの歩行器で練習し、スムーズな移動ができるようになりました。自宅の歩行器も同じものに変更することにしました。(右写真)

リハ
ビリ
新聞



豊田えいせい病院

2020年
8月25日
第16号

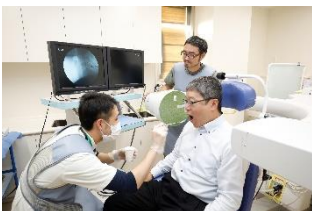
嚥下造影検査(VF)嚥下内視鏡検査(VE)

当院では必要に応じて嚥下造影検査、嚥下内視鏡検査を行っております。

「食道の入り口」は「気道の入り口」と隣り合わせになっており、飲み込みがうまくいかないと気道へ食べ物が入り込んでしまい、誤嚥性肺炎を発症してしまう可能性があります。

嚥下造影検査、嚥下内視鏡検査を行うことで、飲み込みの時の喉の動きを確認できるため、その方に合った食べ物の形態や食事姿勢を決定でき、安全な食事の評価が行えます。

当院では外来受診の方にも必要に応じて検査を行っていますのでご相談下さい。



嚥下造影検査



嚥下内視鏡検査

歩行補助具の選び方

～リハビリ小ネタ～

加齢やケガなどにより歩きが不安定になった時に杖や歩行器といった歩行補助具を使えば、再び安定して歩くことができ、外を出歩く意欲や自信がついてくるものです。リハビリ専門職はその人の足の力やバランス能力などに合わせ、適切な補助具の選択や調整、歩き方の指導をしています。特に大事にしているポイントはその補助具を「生活で役立てることができるかどうか」です。ただ歩きやすいだけでなく、立ち上がり、移動し、座るといった一連の動作をスムーズに行えることが大切です。普段過ごす場所や動き方に合ったものを選ぶと良いです。必要であればリハビリ専門職に助言を受けるとさらに良いと思います。



歩行補助具の種類

リハビリは
豊田えいせい病院に
お任せください！

豊田えいせい病院 診療技術部

回復期リハビリ科 TEL: 0538-34-6123 FAX: 0538-34-6231

療養リハビリ科 回復期リハビリ科と共通

通所リハビリ科 TEL: 0538-34-6223 FAX: 0538-34-6222

訪問リハビリ科 TEL: 0538-34-6137 FAX: 0538-34-6231